

聖書：ヨハネの黙示録 20：7～10

説教題：千年が終わると

日時：2021年9月26日（朝拝）

ヨハネの黙示録第20章は世界の歴史の終わりに関する重要なメッセージが語られている章です。すでに見た1～6節には、キリストがサタンを捕らえて千年の間縛ること、それによってサタンがこれ以上、諸国の民を惑わすことのないようにしたこと、その千年という期間、聖徒たちはキリストとともに治める共同統治の特権にあずかることが述べられました。どのようにここを理解するにせよ、この千年という期間は主を信じる者たちにとって祝福を意味する期間となります。しかしその千年が終わる日のことが今日の7節以降にあります。サタンはこれまで課されていた制限を取り払われ、激しく動き回ることとなります。これがいつ起きるのかについて私たちはどんなイメージを持つことができるでしょうか。

前回と前々回に黙示録20章の千年の理解については3つの代表的な見方があると申しあげました。一つ目は前千年王国説すなわちプレミレです。この立場では先にキリストが再臨し、それから千年王国と呼ばれる祝福の時代が地上に実現すると考えます。この立場で考えるとキリストの再臨はまだで、それはいつのことか分かりません。そしてキリストが再臨してから千年間が経過した後でサタンが解放されます。ですから今日これから見る7節はかなり遠い将来の話になります。千年を文字通りに取る人と象徴的にある程度の長い期間と取る人とがいますが、どちらにしてもそれはかなり先の話となります。

2つ目は後千年王国説すなわちポストミレと呼ばれる立場です。この立場では世界の歴史はその終わりにかけて千年王国と表現されるキリスト教的祝福の時代となる。福音は全世界の隅々まで宣べ伝えられ、この世は圧倒的なキリスト教の影響下に置かれる。その千年期のクライマックスにキリストが再臨すると考えます。しかし二度の世界大戦を経て、この立場に立つ人は少なくなりました。果たして今日、全世界は千年王国と表現されるようなキリスト教的時代になっているのでしょうか。もしそうでなければ、まず先に千年間に亘る理想的なキリスト教社会がこの世に見られなければ終わりの日は来ないことになってしまいます。とすると今日見る7節以降の話も、果たしていつのことなのか、限りなく遠い将来の話になりそうです。

3 つ目は無千年王国説すなわちアミレと呼ばれる立場です。この立場では千年はキリストの復活から再臨までの期間を指す象徴的表現で、千年の統治とは殉教者をはじめとする地上で信仰の生涯を全うした聖徒たちが、天においてあずかっている祝福を指すと見ます。地上に千年王国が起こるわけではないと。この立場では千年の終わりはいつになるでしょう。それはいつでも起こり得ます。神の定めた期間が終了し、救われるべき最後の一人が救われ、いよいよキリストの再臨となります。その直前にサタンの縛りが解かれて、彼が最終的行動に出る。従ってアミレの立場に立つ時、今日見る7節以降の出来事は今日すぐにでも私たちに臨み得る話となります。

そうだとするとこれは脅威ですが、この7節には慰めもあります。ここで「サタンはその牢から解き放たれ」と受身形で書かれています。つまりサタンは許されて、その活動ができるのです。主権者は相変わらず神です。神の全能の知恵と力のもとでこれは起こることなのです。

さてサタンは解き放たれて何をするのでしょう。8節に「地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する」とあります。ここまで黙示録を読んで来た人は同じようなことがこれまでも繰り返し語られて来たことを思い起こすでしょう。たとえば16章14節と16節がそうです。16章14節を見ると、竜、獣、偽預言者から3つの汚れた霊が出て、全世界の王たちのところへ出て行き、彼らを大いなる日の戦いに備えて召集するとありました。そして16節にハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めたとありました。そこにあった要素は今日の20章8節と同じです。「惑わしの力」により、「全世界の王たち」を集め、「戦い」に向かわせる。また19章17～21節もそうです。19章19節に獣をリーダーとして地の王たちとその軍勢が集まること。そして馬に乗る方すなわちキリストとその民に戦いを挑むことが記されています。20節には惑わす偽預言者の存在も記されています。ここにも「惑わし」「諸国の民の召集」「戦い」という同じ要素が見られます。またこの19章と今日の20章7～10節は、前にも述べました通り、どちらも同じエゼキエル書38～39章を下敷きとしてしています。19章17～18節の表現はエゼキエル書39章のゴグとマゴグに対するさばきの言葉をもとにしており、今日の20章8節に「ゴグとマゴグ」とはっきり記されます。ですからこれらはみな同じ戦い、同じ一つの出来事を指すと考えるのが自然でしょう。

ちなみにプレミレの立場ではこれらは別の戦いと見ます。プレミレの見方によれば、19章11～16節でキリストが再臨し、19章17～21節で獣と偽預言者および彼らにつく世界の王たちがさばかれます。そして19章と20章は時間的に連続していると見て、再臨したキリストが20章冒頭でサタンを縛り、千年王国を地上にもたらず。そして千年後にサタンが解放され、全世界の王たちを惑わし、今日の箇所20章7～8節の戦いを引き起こすと見ます。しかしほとんど同じ出来事が何度も繰り返して起こると黙示録は語っているわけではありません。16章14～16節のハルマゲドンの戦いも、19章17～21節の獣と偽預言者のさばきも、今日の20章7～10節もみな同じ一つの最後の戦いを描いたものと見るのが自然です。ですからすでに見た大淫婦・大バビロンのさばきも、また獣と偽預言者のさばきも、そして今日見る悪魔のさばきも、同じ時に起こることです。ただその一つ一つのさばきをテーマ別に、より強調して描いているだけなのです。

さてその最後の戦いについて8節に「ゴグとマゴグ」と出て来ます。これはエゼキエル書に出て来る言葉ですが、これについてはエゼキエル書全体の構成を頭に入れるとより理解しやすいと思います。エゼキエル書ではまず1～33章にかけてイスラエルと諸外国へのさばきが語られます。最後の33章はエルサレム陥落について語られています。そしてこれが転換点となって、次の34～37章にかけて絶望から希望へのメッセージが語られます。有名なイスラエルの真の牧者、将来のメシヤに関する預言、また新しい心・新しい霊を与えるという霊的再生に関する預言。そして最後の37章では干からびた骨が互いにつながり、肉を生じ、生き返るというあの有名な幻が示されます。こうして後は救いの世界が示されるだけかと思いきや、続く38～39章にゴグとマゴグの話が出て来ます。これは神の民を滅ぼそうとして集まる悪の勢力に関する話です。そしてその後の40～48章に新しい神殿・新しい礼拝・新しい相続地の幻が示されます。これは永遠の天国を指す内容です。つまりゴグとマゴグの話は、最終的な救いの実現の直前に強力な悪の活動があることを示唆する内容となっています。終末における最終的な戦いについて語っている部分です。

ではもう少し具体的にこのゴグとマゴグとは一体何でしょうか。まずエゼキエル書38章2節を参照したいと思います。「人の子よ。メシェクとトバルの大首長である、マゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言せよ。」ここから分かることはマゴグとは地

名であり、ゴグとはその大首長、リーダーを指すということです。この後の部分も読むと黙示録の内容とピッタリ一致することが良く分かりますが、時間の関係上、次に39章1～2節を参照します。「人の子よ、あなたはゴグに向かって預言せよ。『神である主はこう言われる。メシェクとトバルの大首長であるゴグよ、わたしはおまえを敵とする。わたしはおまえを引き回し、おまえを駆りたて、北の果てから上らせ、イスラエルの山々に連れて来る。』」ここで神はマゴグの地のリーダー、ゴグに、わたしはお前をイスラエルに連れて来ると言っておられます。神は神の民への一時的攻撃を許すのです。このゴグとマゴグについて色々な人が色々なことを言います。ある人はこれは北の果てから来ると言われているので、北方にある国のことだとします。そして1節のメシェクとはモスクワのこと、トバルとはトボリスクのこととし、つまりロシアのことだと言います。他の人は中国を指すとも言います。しかし発音が似ているからと言って、黙示録は将来の具体的な国を名指しする秘密の書、暗号を解読する書のように読むべきものではありません。ヨハネの黙示録20章8節は、このエゼキエル書の「ゴグとマゴグ」を受けていますが、どこかの特定の国や地方ではなく、「地の四方にいる諸国の民」を指して使われています。つまり歴史の最後には神と神の民に対する全世界的な迫害・挑戦が生じるということです。サタンの惑わしによって、全世界的な反逆行動が見られるようになるということです。8節最後に「彼らの数は海の砂のようである」ともあります。これは地上に千年王国が樹立されると考える人たちにとって都合の悪い言葉です。地上に千年にもわたるキリスト教的王国が打ち立てられた直後に、なぜこんなに多くの敵がいるのか。しかし海の砂のような人々です。千年王国とは、千年という期間が終了すると全世界がガラッと態度を変えるような、その程度のものなんでしょうか。しかし黙示録の千年は地上の王国について語ったものでないとすれば、の問題もありません。この最後の戦いが引き起こされないようにこれまでサタンは縛られ、コントロールされて来ましたが、その縛りが解かれて、ついにこのことが起こるのです。

9節に「彼らは地の広いところに上って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した」とあります。「聖徒たちの陣営」と「愛された都」とは、どちらも神の民、教会を指します。「陣営」とはキャンプのことで、イスラエルが荒野をさまよいつつ野営したことを指します。つまり教会はこの世にあって旅人であり、天国へ向かう巡礼者の集団であるというイメージです。そのようにこの世においては異国人であり、世から見下されていても、一方から見れば「神に愛された都」と言われています。これは

この世の「大きな都」大バビロンと対照的なものです。神の前に高ぶって自らを誇るこの世の大きな都ではなく、神に愛されている都です。その都はどんなに美しく輝くかがこの後 21～22 章に記されます。このような神の民・教会がサタンの下で一致団結したこの世の勢力に包囲される時が来ると言います。前に見た 11 章 7 節と同じです。果たしてその結果はどうなるのでしょうか。

9 節後半に「すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした」とあります。エゼキエル書 39 章 6 節にこう言われていました。「わたしはマゴグと、島々に安住している者たちに火を放つ。」そして具体的にこれは主の再臨によって生じることと考えられます。テサロニケ人への手紙第二 1 章 7～9 節：「このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。」そしてここでも強調されているのは、主の勝利は圧倒的であることです。この最後の戦い、ハルマゲドンの戦いは長くは続きません。始まったと思ったら一瞬の内に勝負がついてしまいます。19 章 20 節で見た通りです。あるいは 17 章 14 節でも見た通りです。ほとんど戦いにはならず、始まったか始まらない内に勝負は決するというのが聖書の描写です。あのサタンでさえ、そのように敗北するのです。

そしてサタンのさばきが最後 10 節に記されます。「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。」獣や偽預言者が火と硫黄の池の中に投げ込まれたと 19 章 20 節にありましたが、それから千年間を経て悪魔も同じ場所に入れられたという意味ではありません。先に述べたように獣や偽預言者のさばきと、サタンのさばきは同じ時のことと考えられます。一緒に投げ込まれるか、獣と偽預言者のさばきの直後に投げ入れられるのでしょうか。なおこの「火と硫黄の池」も象徴的表現です。前にも述べた通り、サタンは霊的存在ですから、物理的な池に投げ込まれて肉体的に苦しむということはありません。これは霊的な苦しみとさばきの下に置かれるという意味です。そしてその苦しみは永遠に続くものであることが「彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」という言葉に示されています。肉体を持ち、文字通りの火の池に投げ込まれて直ちに絶命するならまだ楽でしょうが、これは意識を持った状態で永遠に罰

され、苦しめられる状態に置かれることを現したものです。

以上、聖書はサタンの最期はこのようになる！と記します。最初の人間アダムとエバを惑わし、道を踏み外させた存在。世界を暗闇の支配の中に置いて来た存在。今なお世界と私たちを悩ませている存在。獣や偽預言者や大淫婦と言った道具を用いて神に逆らい、その民を迫害し、誘惑し、苦しめる存在。そのサタンはこのようないつもない最期を迎える。火と硫黄の池に投げ込まれ、ついに滅ぼされる。たとえ今、この世界でどんなに悪が力を持っているように見えても、あるいはそのサタンにだまされてついて行く道に祝福があるように思えても、その先に待っているものはこれです。この彼について行く者も同じ運命を刈り取ることとなります。このことを見据えて、今日私たちの行くべき道を正しく選び取る者でありたいと思います。

この最後の日までは私たちに戦いがあります。むしろ終わりの時直前に激しい悪の攻撃があると黙示録は語ります。千年が終わってサタンが解き放たれ、全世界を惑わして聖徒たちを取り囲む日。それはいつ起こるのか私たちには分かりません。私たちがそのただ中に置かれるかもしれません。しかし私たちはこう思いたい。もしあまりにも厳しく、苦しい状態に置かれるなら、その時こそ救いは近い！と。サタンの最終的な攻撃行動の直後に主の再臨と勝利が示されます。ですからもし私たちが耐えられないほどひどく苦しめられ、圧迫されているなら、それはいよいよ救いの時がそこまで来ていることの証拠です。

現在進行形で進んでいる千年という期間が終わる日が来ます。サタンが解き放たれる日が来ます。私たちはその心積もりをしておきたいと思います。しかしその後まもなく主が再臨し、圧倒的に勝利し、サタンをさばかれます。この約束と幻を心に刻み付けて、揺らぐことなく私たちの救い主を信じ、告白し、従う歩みへ進みたいと思います。そして主がもたらしてくださるあらゆる悪と苦しみの解決と、その先に備えられている栄光の御国での生活へと導かれる者たちでありたく思います。